谷恒生

新マラッカ海峡

KADOKAWA NOVELS

甦った不死身の超人、土岐雷介。復讐に燃ら
日本に凄まじい"戦場"をもちこんだ!

書下しサスペンス・アクション

カドカワノベルズ

昭和五十七年七月二十五日初版発行

著者　谷恒生（たにこうせい）
発行者　角川春樹

新（しん）マラッカ海峡（かいきょう）

印刷所　暁印刷株式会社
製本所　株式会社本間製本
装丁者　岡村元夫

発行所　株式会社角川書店
東京都千代田区富士見二丁目三　振替東京三一九五三〇八
電話東京三二六一七二二一大代表　〒一〇二

Printed in Japan　落丁・乱丁本はお取替えいたします
0293-771302-0946(0)

KADOKAWA NOVELS

新マラッカ海峡

谷恒生

カバー絵・本文イラスト／箕村禧夫

此为试读，需要完整PDF请访问：www.erton

目次

第一章　関東山吹組　9
第二章　マラッカの追憶　52
第三章　銀色の箱　93
第四章　戦　場　132
第五章　イトウ機関　168
第六章　甦る伝説　197

第一章　関東山吹組

1

仲沢がブランディーグラスを傾けながらカレンを舐めるように見詰めている。カレンは男の嗜虐にみちた視線に竦みきっていた。男のガウンのはだけた胸もとから剛毛がのぞく。汗に濡れ、鋼のような光沢を放つ。

男はグラスのブランディーをすすりこむと、口もとに野卑な笑みをきざんだ。吊りあがり気味の眼が劣情をたぎらせている。

「おまえ、いくつだ？」

男が尖がった顎を突きだすようにして訊いた。が、カレンに意味のわかるはずもない。ただかなしげに首を振るばかりだ。

カレンはこの春で十五になる。そろそろ結婚を考えてもいい年頃だった。実際、カレンは隣の集落の若者に好感をいだいていた。

去年の祭の晩、カレンの集落へ踊りにきたその若者と視線が合い、それだけで心がときめき、耳のつけ根まで赤らんでしまった。若者にもカレンの想いが通じているらしい。彼の見詰める眼にある種切迫した感情がこもっていた。

カレンは今年の祭までにその若者と一緒になりたいと小さな胸の中でひそかに願っていた。だが、そのささやかな願いは、いま目の前のソファに坐っている男とその仲間たちによって無残に打ち壊されてしまった。村は焼かれ、父も母もいとしい若者も惨殺され、カレンたち娘だけがこの遠い異国の地に拉致されてきたのだった。

不意に男が立ちあがった。カレンはとっさに細い腕で胸を隠し、両膝をかたくなに閉じ合わせた。男がなにをしようとするのか、本能的に悟ったのだ。

男は稚い胸を両手でおおいながら部屋の隅にうずくまっているカレンに近づくと、いきなり平手で彼女の

此为试读，需要完整PDF请访问：www.erton

頬を殴りつけた。頬が鋭く鳴り、ぼってりした唇から悲鳴が噴きこぼれた。悲しい絶望的な悲鳴であった。

男は容赦なくカレンの衣服を剝ぎ取った。カレンの母親が二週間もかけて丹念に織りあげたカラフルな民族衣装が引きちぎられ、破り棄てられた。

カレンの浅黒い肌がむきだしになった。華奢な鎖骨がわななき、肌が総毛立った。それでもなお、カレンは相手を必死にこばみ、身体をよじって逃げようともがいた。男はその腕をねじあげ、固い乳房をわし掴みにした。

「ひい――」

繊細な悲鳴が尾を引いて流れた。男はカレンの乳房を乱暴にまさぐり、蕾のような淡紅色の乳首に爪を立て、うなじに唇を這わせた。腐臭のような男の息がカレンの鼻孔にどっと押し寄せてきた。

カレンは恐怖と絶望のあまり、意識を失いかけた。薄れゆく意識の中でカレンは懸命に祈った。

不意に、ドアがはじけとんだ。爆破でもされたような衝撃だった。冷気が一陣の風となって暖房の利いた室内に吹きこんできた。ドアはノブがへしゃげ、鍵が壊れている。人間業とは思えない圧力である。

「誰だ、貴様」

男は押さえつけていた娘の身体からすばやく上体を起こすと、突然の侵入者へ怒りに燃えた眼眸を投げた。鼻孔を潮のにおいがかすかに刺した。それは相手の体臭であった。

相手と視線が合致した。刹那、戦慄が背筋を駆けのぼり、膝がしらがわらいだした。

相手は途方もない巨人であった。この冬一番の寒さだというのに素肌の上から擦り切れた革ジャンパーをひっかけただけである。伸び放題の蓬髪が貌の半ばを隠し、頬から頑健な顎にかける無精髭が密生している。顔面を掩った髪の間からのぞく眼が幽鬼のように陰惨で、見る者を射竦めずにはおかない底冷えのする光をたたえているのだ。

男はわななく脚を踏みしめると息を詰め相手の強すぎる眼光に立ち向かった。

恐れを知らない男であった。十七歳になってボクシ

ングジムへ通いだし、二十四歳で世界のランキングに登録され、二度ミドルウエイトの世界タイトルマッチのリングへ登ったキャリアを誇り、それが仲沢の絶対的な自信になっている。

引退後、その腕と度胸を見込まれて関東山吹組に迎えられ、組の期待に十分そう働きを示してきた。フィリピンやタイに出向いては射撃の腕をみがき、暴力団同士の抗争では常に先頭に立ち、これまでに五人冥土に送っている。その野獣のような残虐性と無鉄砲なまでの行動力は、関東一円の暴力団組織を震えあがらせ、山吹組の関東制圧に貢献した。

「だし抜けにドアを叩き壊しやがって。そんな真似して五体満足で帰れるとでも思っているのか」

男は敵意をこめて睨みつけ、余裕の笑みを浮かべてファイティングポーズをとった。だが、その笑みが虚勢であることは額に滲んだ脂汗でも明らかであった。

相手は微動もせず、両腕をだらりと下げたまま冷えきった眼眸を男に送っている。

男の頸すじに赤味がさした。顔面に微かな畏怖が読み取れる。

脳裡に二度目の世界タイトルマッチの記憶が実感として甦ってきた。チャンピオンはニカラガの英雄と呼ばれたハードパンチャーで二十二戦して二十回のノックアウトを記録していた。しかもそのうちの十四回が一ラウンドK・Oという凄さまじい強打者であった。

前評判も圧倒的に自分の不利と出た。某スポーツ新聞などは所属ジムの会長の犠牲にされ、ハードパンチの生贄となる哀れな日本人ボクサーとまで書かれたほどであった。

万にひとつの勝機さえ見いだせない試合だった。しかし、彼は燃えに燃えた。逸すれば再びめぐってこないチャンスであった。ニカラガの一見弱そうな男をリングに這わしさえすれば、貧乏人のせがれで子供の頃から鼻つまみ者だった男が世界チャンピオンの栄光に輝き、世間から英雄とあがめられ、この手に大金を掴むことができるのだ。

男は二か月に及ぶキャンプを張り、限界とも思えるハードトレーニングを積み、二百ラウンドのスパーリ

ングを消化して拳を鍛えあげた。
相手を倒すことのみを考えて男はリングにあがった。相手の顎は意外に脆そうであった。眼には落ち着きがなく、超満員に膨れあがった観衆の喚声に神経を尖がらせ、しかも、減量苦からか、眼の縁にどす黒い隈ができていた。
内心しめたと小踊りした。これなら勝てる。そう確信した。
ゴングが鳴った。
コーナーから猛然ととびだした瞬間、彼は血の凍るような恐怖を覚えた。グローブを構えたチャンピオンはゴングと同時に、別人になっていた。鷹のように鋭い眼光、鍛えぬかれた鋼鉄のような上半身、脚のバネ、そして全体からほとばしる圧倒的な威圧感……。
いま目の前にたちはだかっている相手は、彼を一ラウンドでリングに沈めたあのミドル級史上最強の世界チャンピオンなど較べものにならない威圧感を備えているのだ。
男はファイティングポーズをとりながら、身動きすらできないでいる。呼吸が苦しい、体温が加速度をつけて冷えていくような気持だった。心臓の鼓動が内臓いっぱいに割れかえる。相手に気圧されて腰がひけ、闘志が萎え、触れられただけで尻もちをつきそうだ。
糞!!
男はふるえおののく奥歯を躍起になって噛み締めた。破滅的な衝動が胃の奥底から衝きあがってきた。
俺はあの偉大なチャンピオンに闘いを挑んだ男じゃないか。こんな図体ばかりでかいでくの坊に怖じけづいてどうする。
男は夢中でストレートを繰りだした。十二分にウェートを乗せたみごとな一撃が相手の顔面に炸裂した。
鈍い音が鳴った。
男は愕然として立ち尽した。全存在を賭けて放った一撃である。相手は確実に倒れるはずだった。それだけの手ごたえがあった。それなのに、拳は鋼を殴りつけたようにはじきかえされたのだ。
相手は微かに身体を揺らしただけだった。世界ランカーだった男にストレートを叩きこまれても顔色ひと

つ変えない。
「貴様!!」
男の顔面が朱に染まった。唯一のプライドを踏みにじられた屈辱感が吐逆のように衝きあがってきた。
仲沢は低く唸ると必殺の右ストレートを相手の貌へ叩きこんだ。だが、相手は無造作に彼の拳を払いのけ、ひょいとその手首を掴んだ。
男の喉もとから汚ならしい叫びが噴きこぼれた。骨が砕けそうなほどの激痛だった。手首を締めつける相手の握力はそれほど強烈だった。
相手は悲鳴をあげる男に蔑むような一瞥を投げ、握った手首に力をこめた。鈍い音をたてて男の腕が枯枝のようにあっけなくへし折れた。
男はあまりの痛みに絶叫を張りあげた。その瞬間、相手の一撃がもろに男の顔面を捉えた。巨大なハンマーで殴りつけられたような衝撃だった。
男は宙を飛び、弧を描いて壁に頭から激突し、床へ落ちた。身体がよじれ、両脚が曲がったまま、身動きもしない。左頬が内出血している。顴骨が砕けてしまったのだろう。
「クントキ!!」
カレンが我にかえったように、大男にむしゃぶりついてきた。たくましい胸板にしがみつき、潮のにおいのような独得の体臭を胸いっぱいに吸いこんだ。張りのある瞳から涙がとめどなくあふれ出てくる。
カレンの感情がおさまり、涙がかわくまでどれだけ時間がかかっただろうか。
やがて大男は栗色がかったカレンの髪を撫で、いたわりのこもった声で囁いた。
「さあカレン、服を着るんだ。裸でいるとこの国は寒いから風邪をひいてしまうよ」

2

横浜関内駅近くにある関東山吹組本部の組長室は重苦しい沈黙が澱んでいた。
革張りのソファに腰を沈めている権田原組長は、薄い眉を寄せ、にがりきっている。
居並ぶ幹部、準幹部たちも深刻そのものといった表

情であった。
「で、どうだ、仲沢の様子は？」
若衆頭の鈴崎が膝を乗りだすようにして準幹部の成木に訊いた。
「へえ」
成木は狡猾そうに眼球を動かすとわざとらしく声を落とした。
「仲沢幹部は意識は戻っていますが、話のほうはさっぱり要領を得ません。こういってはなんですが、多少神経がいかれちまったようなんで」
「仲沢は腐ったとは言え、元世界ランカーだ。素手で仲沢をあれだけ痛めつけられる野郎はそうざらにいねえ」
鈴崎が顔色をうかがうように権田原へちらりと視線を投げた。
「なにしろ利き腕をへし折られ、頬骨を砕かれたんですからね、組長」
「ぶざまな野郎だ」
権田原が吐き棄てた。
「仲沢はもう使えん。おまえたち、これから仲沢の面倒なんぞ見なくてもいい。あいつは関東山吹組の看板に泥をかけやがった」
いたわりの破片さえない非情な声であった。組員たちは怖ぞけだつように背筋をふるわせた。
権田原にとって仲沢など使い捨ての駒でしかない。利用価値がある間はおだて、誉めそやし、功名心をあおり、危険な仕事を押しつける。
飼犬が働けなくなれば容赦なく屠殺場へ送り込んでしまう。哀れな仲沢は明日の組員たちの運命でもあるのだ。それは組員たちが十二分に承知している。だからこそ、組長に命じられるままに身体を張り、生命を投げだすのだ。
「他組のしわざではあるまいな」
権田原は粘液質の声で呟くと、おもむろにテーブルに手を伸ばし、ハバナ産の葉巻を取りあげた。すかさず鈴崎が及び腰でカルチェを擦った。権田原は火を点け、傲然と葉巻をくゆらせた。
「わかりかねますな」鈴崎が慎重に答えた。

「仲沢の気に入った娘が襲った人間に連れ去られました。他組がうちの計画を嗅ぎつけ、妨害にでたのではないでしょうか」
「それはないでしょう」
それまで口を噤んでいた神林幹彦がほとんど聞きとれないほどの低音で呟き、俯けていた視線を鈴崎の顔面に据えた。
鈴崎の表情が強ばった。怖ぞけに駆られて竦んでしまったような表情であった。神林がよくひびく深い声で続けた。
「他組が仲沢に重傷を負わせて拉致するリスクをおかすほどあの異国娘に価値はない。まして今度の計画が他組に洩れる道理はないし、計画と娘は直接には無関係だ」
鈴崎は何かいいかけたが、あきらめたように中途で声を呑みこんだ。いつも名状しがたい威圧のようなものを受け、それがしゃくでしかたがなかった。
神林幹彦は正式には関東山吹組に所属していないが、権田原組長の懐刀的な役割をはたしている。山吹組の頭脳ともいうべき存在だった。
経歴は明らかではない。七〇年安保闘争で活躍した過激派の指導者であったとか、某大商社のエリートだったとか、噂はまちまちだが、どれもいまひとつ信憑性に欠ける。だが、サイドベンツを切った仕立のよいコンチネンタル調のスーツに細身のネクタイを結んだ神林は、暴力団幹部の狡猾で野卑な臭いなどと無縁なものであった。大柄ではないが鞭のようにしなやかな体つきをしている。短かめに整えた髪には微かな乱れもない。涼しげな眼に知的な光がただよい、肉のうすい頬から端正な口もとにかけての線が非情で酷薄な影を帯びている。
「どう思う、神林」
権田原が打診するような口調でいった。三千人に及ぶ構成員と傘下暴力団二十三団体を擁する関東最大の暴力団の組長でさえ、神林には一目置いているようであった。
「さて」
神林が目をすぼめた。相変らず端正な表情だが、眼

此为试读，需要完整PDF请访问：www.erton